

乳幼児の事故と安全教育

— 親の養育態度と幼児の安全行動 (2) —

児童家庭福祉研究部 高橋種昭・須永進・湯川礼子
母子保健研究部 斉藤幸子
囑託研究員 星美智子・川島秀二(あかいとり幼稚園)・
上甲千鶴子(淑徳幼稚園)・萩原英敏(淑徳短期大学)

要約:

今年度は次の2種類の調査を実施した。

<調査1>

東京都内A幼稚園児108名を対象に夏休み期間中に発生した事故の詳細な記録を依頼した。結果は幼児期に多い衝突、転倒などの事故が多かったが、夏休み中のため過半数は戸外の遊び中の事故であった。その中には外出中の不慣れた場所での事故が多くみられた。

<調査2>

東京都内のA幼稚園とB幼稚園の登降園時の母親と園児の道路上の行動をVTRによって記録し、危険な行動について分析した。その結果、母親の多くが当然行うべき子どもへの保護を怠ったり、交通規制の違反となる行動をとっていた。園児もまた同じように、非常に危険な路上での行動をとるものが多かった。

終わりに、過去3年間の調査結果から言えることは、幼稚園児の事故防止のためには、保護者については、幼児の行動特徴についての正しい認識と理解をもつことと、安全行動についての良きモデルとなる心構えを常にもつことが要求される。また幼児に対しては、個々の状況に応じたより具体的な安全についての指導を繰り返すことと、保護者との約束を守るしつけの徹底が期待される。

見出し語: 安全教育, 幼児の行動特徴, 事故発生機序

Study on the Actual Condition of Present Children's Lives — The Way of Bringing up Infant by the Parents and Infant's safety behavior —

Taneaki TAKAHASHI, Susumu SUNAGA, Reiko YUKAWA, Sachiko SAITO
Michiko HOSHI, Shuuji KAWASHIMA, Chizuko JYOKOU, Hidetoshi HAGIWARA

The following two researches were put it into effect this year.

- I. It requested the records of accidents during the summer vacation for 108 kindergarteners in Tokyo.
The results were many clashes and violent falls, and that the accidents of major were caused by playing out. In that case, it's cleared lots of accident occurred in strange place out.
- II. We analyzed the dangerous behaviour of parents and children who walked along the road to the kindergarten, by VTR. It was cleared most of parents often neglected their duties to protect children from the danger, and some of them didn't keep the traffic rules. A few children were doing the very dangerous deed on the road too.

This study's result, through three years, as follows; To protect the accidents of children, at first parents should have the correct consciousness and understanding about children's distinctive doing, second they're asked to show the behaviour as the good model on safe, and that for children should be educated repeatedly, for example more concrete leading to safety suited to various cases. In addition, to avoid the accidents they are requested to keep the rule between parents and them too.

Key Word: Safety Education, Children's Distinctive Doing, Accidental Occurrence Mechanism

目 的

幼児をとり巻く環境は、その変貌が著しい。その変貌しつつある生活環境の中で、幼児の不慮の事故やそれに伴うケガは一向に減る気配がなく、交通事故や水による事故に至っては、まさに深刻とも言える状況になっている¹⁾²⁾。本研究では、こうした幼児の事故やケガの実態を明らかにし、その発生機序について研究を進め、今後の幼児の安全教育の一助とすることを目的としている。

初年度(1988)は、幼児の事故やケガに対する親の安全認識度に関する調査を実施し、ついで昨年度には、①親の養育態度と事故の関連、②子どもの性格・行動特性(親およびクラス担任の評価)と事故との関連について考察した。今年度は、ひとつには、子どもの非日常的状態での事故を見るために、夏休み期間中の事故についての実態を調査し、第2には、交通事故に焦点を当て、日常生活(ここでは幼稚園の登降園時)における親と子の路上の歩行行動をビデオカメラに収めて事故への危険性について分析した。

I 夏休み中の事故の実態

II 親と子の歩行行動の観察とその分析

I 夏休み中の事故の実態

調査方法

1. 夏休み中の事故記録 夏休み中に発生した事故について事故発生の日時、場所、事故の種類、原因、けがの種類など11項目を予め用意した事故記録用紙に事故1件ごとに1枚記入させひとり5枚ずつ配布した。

2. 親の養育態度 「公園に遊びに行く時」「友達と遊ぶ時」「道路と一緒に歩く時」など7場面について親の養育態度を質問紙により調査した。

3. 子どもの性格行動特性の評価 「体力」「運動能力」「落ち着き」「友達と仲よく遊ぶ」など14項目を親と幼稚園の担任に同一の子どもについてそれぞれ3段階に評価させた。

上記の3種類の質問紙を夏休みに入る前に幼稚園を通じて配布し、夏休み終了後に回収した。(質問紙2. 親の養育態度、3. 子どもの性格行動特性の評価は昨年度紀要第26集参照。)

対象 東京都私立A幼稚園の3歳から5歳の園児男女合計108名とその母親及び担任教諭。

調査日時 1990年夏休み期間中。

結 果

1. 夏休み中の事故の実態

(1) 事故の有無 夏休み中に1度も事故が無かったのは全園児108名のうち半数以上の58名(54%弱)である。事故があったのは表1に示すように3歳20名(50%)、4歳14名(41.2%)、5歳16名(47.1%)、合計50名である。そのうち同一児で事故が2回あったのは11名(3歳4名、4歳4名、5歳3名)、事故3回は3名(3歳2、4歳0、5歳1)、4回は2名(3歳1、4歳1)、事故総数は74件である。

表1 事故の有無

	事故あり	事故なし	計
3歳児クラス	20(50.0)	20(50.0)	40(100.0)
4歳児クラス	14(41.2)	20(58.8)	34(100.0)
5歳児クラス	16(47.1)	18(52.9)	34(100.0)
計	50(46.3)	58(53.7)	108(100.0)

(2) 発生時刻 発生時刻の明らかな72件についてみると午前6時から12時までの午前中に23件(31.9%)、12時から18時までは半数以上の39件(54.2%)、18時以降8件(11.1%)、深夜にも2件(2.8)発生している。時刻別にみると(図1)、昼食時間をはさんで午前と午後には山があり午前中は11時台がピークになっている。午後は14時台、15時台が多く、夕方の17時台にも一つの山がみられる。

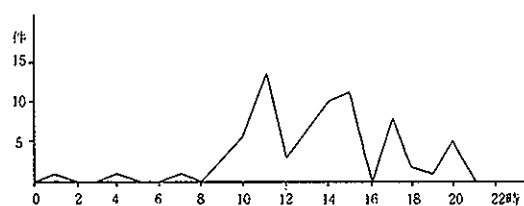


図1 事故の発生時刻 (N=72)

(3) 発生場所 屋内、屋外に分けてみると屋内は31件、屋外が43件で屋外での事故が多い。屋内では居間・子ども部屋・寝室が11件で一番多く、次いで玄関・出入り口が5件、台所4、ベランダ4など表2に示したように屋内のさまざまな場所で事故が起きている。屋外では道路12件、公園・児童遊園・グラウンド12件で半数以上を占めている。プール(5)、海(4)、山林(3)での事故もある。庭、団地、マンションの空き地など自宅付近での事故は

少ない。

表2 発生場所

場 所		件数(%)
屋内	居間・子ども部屋・寝室	11(14.9)
	玄関・出入り口	5(6.8)
	台所	4(5.4)
	ベランダ	4(5.4)
	浴室・トイレ	2(2.7)
	廊下	2(2.7)
	階段	1(1.4)
その他	2(2.7)	
屋外	道路	12(16.1)
	公園・児童遊園・グラウンド	12(16.1)
	プール	5(6.8)
	海・川・池	4(5.4)
	山林・牧場	3(4.1)
	自宅の庭	3(4.1)
	団地マンションの空き地	2(2.7)
	その他	2(2.7)
計		74(100.0)

(4) 子どもの行動 子どもが何をしている時に事故が起きたかを表3に示した。1位が遊び・運動・水泳中で50件と多く、2位は歩行中の15件であり、ほとんどの事故は子どもが活動している時である。また事故が起きた時に親やその他のおとなも一緒にいたのが74件中46件(62%)と半数以上である。子どもだけの時には親に訴えない場合もあるので事故数はもっと多いことも考えられるが、親と一緒にいても事故は起り得るということがわかる。

表3 何をしている時

	件数(%)
遊び・運動・水泳	50(67.6)
歩行中	15(20.2)
入浴・トイレ	2(2.7)
食事手伝い	2(2.7)
食事中	1(1.4)
就寝中	1(1.4)
その他	3(4.1)
計	74(100.0)

(5) 事故の種類 事故の種類は転倒が74件中31件(41.8%)と4割以上であり、衝突も19件(25.7%)と多い(表4)。

今回の調査では子どもの事故に多い交通事故、溺水は1件もなく、ほとんどが転んだり、人や物にぶつかる程度の事故である。

表4 事故の種類

	件数(%)
転倒	31(41.8)
衝突	19(25.7)
切る・刺す	7(9.5)
転落	6(8.1)
はさむ	4(5.4)
火傷	3(4.1)
ひっかかる	3(4.1)
その他	1(1.3)
計	74(100.0)

(6) 事故の原因 事故の原因または事故のきっかけとなったものをまとめたのが表5である。道路の凹凸や石などがきっかけで事故になったものは18件(24.3%)で一番多い。ガラスやナイフなどの危険な物による事故、自転車・三輪車の事故は各々10件(13.5%)である。自転車による事故のうち本人が乗っている事故は9件である。その他家具やふとん、ドア、人、階段、遊具なども事故の原因、きっかけとなっている。

表5 事故のきっかけとなったもの

	件数(%)
道路の凹凸・石など	18(24.3)
ガラスなど危険物	10(13.5)
自転車・三輪車	10(13.5)
家具・布団	9(12.2)
ドア	6(8.1)
人	6(8.1)
階段	4(5.4)
遊び道具	4(5.4)
火	3(4.1)
すべり合・ブランコ	2(2.7)
プール	2(2.7)
計	74(100.0)

(7) けがの種類と部位 事故によるけがの種類では(表6)すり傷が34件(46.6%)で半数近い。次いで打撲21件(28.4%),切り傷12件(16.2%)の順である。事故はあったがけがに至らなかったのは74件中6件である。けがの部位は図2のように足・脚が45%弱で最も多く、次いで手・指、顔、頭・腕の順で衣服から出ている部位にけがが多い。けがのあった68例中医師の手当を受けたのは「ドアにはさまり爪がはがれた」「門柱にぶつかり頭部に切り傷」の2例であり、家で手当したものが66%,その他は特に手当てせず放っておく程度のけがである。

表6 けがの種類 (複数回答 N=74)

	件数(%)
すり傷	34(46.6)
打撲	21(28.4)
切り傷	12(16.2)
火傷	3(4.1)
刺し傷	2(2.7)
その他	1(1.4)
ケガなし	6(8.1)

れたかを回答してもらったのが表8である。子ども自身が気をつける(43.2%),「親が気をつける(35.1%)」,「環境整備(16.2%)」,が上位にあげられている。「子ども本人が気をつける」ほどの状況の事故にも挙げているが,「親が気をつける」は不慣れな場所での事故,子どもを急がせた時,心身不調・眠気時の事故に多く,事故の状況を振り返り親の不注意を反省している。幼児期は発育の途上であり運動能力が未熟なために起る事故も多いが,小さな事故には「この程度は仕方ない」「体で覚えていくしかない」など体験を重視する回答もみられる。

表7 事故時の状況 (複数回答 N=74)

	件数(%)
不注意・危険な動作	28(37.8)
はしゃぐ・ふざける	17(23.0)
不慣れな所(旅行先など)	16(21.6)
運動能力の未熟	15(20.3)
急ぐ・せかされる	7(9.5)
不機嫌・不調・眠気	5(6.8)
タバコの火などの被害	5(6.8)

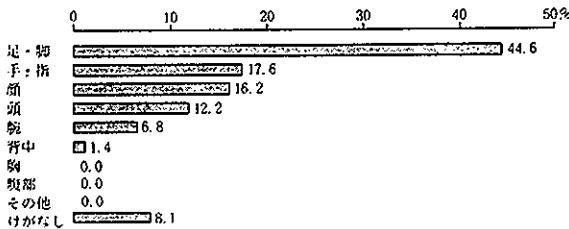


図2 ケガの部位 (複数回答 N=74)

表8 未然に防ぐ方法 (複数回答 N=74)

	件数(%)
本人が気をつける	32(43.2)
親が気をつける	26(35.1)
環境を整える・危険物の除去	12(16.2)
この程度は仕方ない・体で覚える	6(8.1)
相手が注意すべき	2(2.7)
思い付かない・わからない	2(2.7)
無記入	4(5.4)

(8) 事故状況と母親の反省

事故が起きた前後の状況についてさらに詳しく記載されたものをまとめたのが表7である。本人が不注意であったり危険な動作をしていたために事故になったのが28件と多い。次いできょうだいやいとこ,友達と一緒にいてはしゃいだり,ふざけていたために事故につながったものが17件ある。旅行先,親戚の家など慣れない場所は事故を起すきっかけとなり易く16件発生している。また幼児期は運動能力が未熟なために起る事故も多い。急いでいる時,周囲からせかされるなどの状況も事故に結びついている。その他心身の不調や眠気も事故発生の誘因となっていた。

これらの状況をふまえ,この事故はどうしたら避けら

2. 親の養育態度と夏休み中の事故の有無

「公園に行く時」「おもちゃを与える時」「友だちと遊ぶ時」など日常的な場面,状況を7項目取り上げ親の態度をそれぞれ3選択肢から選んでもらい事故の有無との関係をみた。その結果を表9に示したが,親の養育態度は事故なし群,事故あり群とも同じ傾向がみられ,7項目とも養育態度と事故の有無に有意な差は認められなかった。

3. 性格行動評価と夏休み中の事故の有無

子どもの性格行動特性14項目について親と園の担任にそれぞれ3段階に評価してもらい夏休み中の事故の有無との関連をみたのが表10である。親が評価した項目のう

表9 親の養育態度と事故の有無

		事故なし	事故あり
		N=58	N=46
1. 公園などに遊びに行くとき	親がついていく 危なくないように注意して出す 特に心配していない	89.7 10.3 -	82.6 17.4 -
2. おもちゃを新しく与えるとき	安全かどうか確かめてから与える 安全に遊べるかどうか見ている 特に考えない	37.9 51.7 10.3	34.8 45.7 19.6
3. 友達と遊ぶとき	乱暴な子とは遊ばせない 危険な遊びをしないように注意する 特に何も言わない	1.7 93.1 3.4	2.2 93.5 4.3
4. 道路を一緒に歩くとき	必ず手をつなぐ 危険な所だけ手をつなぐ 自由に一人で歩かせる	70.7 29.3 -	65.2 32.6 -
5. 幼稚園にいらっているとき	危ないことをしていないか気がかり 何をしているか気がかり 特に気にならない	12.1 29.3 56.9	10.9 26.1 63.0
6. 子どもの食べるものについて	親が与えるものだけを食わせる 欲しがるものだけを与える 買い食いなど子どもの自由にさせる	67.2 27.6 -	65.2 32.6 -
7. ちょっとした傷をしたとき	念のため医者にみせる 母親が手当する 放っておく	8.6 86.2 5.2	2.2 91.3 6.5

・資料不備の4例を除く ・無回答は省略

ち、「事故やけががほとんどない—多い」の1項目のみに夏休み中の事故の有無と5%水準で有意差が認められたが、その他は親、担任の評価と事故の有無に有意な差はなかった。

4. 事故多発児

事故の有無と親の養育態度および行動特性の評価とは有意差が認められなかったが、夏休み中に事故3回以上の事故多発児5例を取り上げ検討した。昨年度の親の養育態度と「事故やけがの多い—少ない」との関係では「公園に行くとき」の「注意して出す」の1項目に有意差があったが、5例のうち親の養育態度がその項目に該当するものは1例もなかった。また親・担任による行動特性評価14項目中、親・担任の両者が共通して「事故が多い—少ない」との間で1%の有意水準で差があった項目は「落ち着いている—衝動的」「気持が安定している—興奮しやすい」の2項目であった。今回の5例の中で1例のみが担任に「衝動的」と評価されているがその他は親・担任ともに上記にチェックしていない。即ち夏休み中に事故の多かった5例について特別な傾向を見出すことは出来なかった。

表10 親・担任の行動評価と事故の有無

	親		担任	
	事な故なし	事事故あり	事な故なし	事事故あり
	N=58	N=46	N=58	N=46
事故・けががほとんどない ふつう 事故・けが多い	39.7 56.9 3.4	45.7 39.1 15.2	3.4 79.3 15.5	6.5 78.3 15.2
体力がある、活動的 ふつう 体力がない、不活発	46.6 50.0 3.4	54.3 43.5 2.2	27.6 63.8 6.9	23.9 58.7 17.4
運動能力が優れている ふつう 運動能力が劣る	20.7 74.1 5.2	28.3 63.0 8.7	22.4 55.2 20.7	21.7 60.9 17.4
動作がきびん ふつう 緩慢、のんびり	27.6 60.3 12.1	21.7 56.5 21.7	31.0 39.7 27.6	17.4 39.1 43.5
物事に慎重 ふつう 物事にがむしゃら	32.8 58.6 8.6	32.6 54.3 13.0	29.3 50.0 19.0	32.6 50.0 17.4
落ち着いている ふつう 衝動的	13.8 79.3 6.9	13.0 71.7 15.2	13.8 70.7 12.1	19.6 60.9 19.6
言われたことに従う ふつう 言われたことを守らない	31.0 65.5 3.4	26.1 63.0 10.9	29.3 65.5 3.4	23.9 73.9 2.2
注意力がある ふつう 注意力がない	27.6 65.5 6.9	13.0 71.7 15.2	10.3 74.1 13.8	10.9 67.4 21.7
年齢よりしっかり ふつう 年齢にくらべて幼稚	17.2 72.4 10.3	17.4 73.9 8.7	25.9 55.2 17.2	17.4 60.9 21.7
気持が安定している ふつう 興奮しやすい	22.4 63.8 12.1	19.6 67.4 13.0	27.6 65.5 5.2	19.6 65.2 15.2
手先が器用 ふつう 手先が不器用	27.6 69.0 3.4	34.8 58.7 6.5	22.4 56.9 19.0	17.4 58.7 23.9
なかよく遊ぶ ふつう よくけんかする	44.8 53.4 1.7	37.0 56.9 6.5	25.9 69.0 3.4	19.6 69.6 10.9
おとなしい ふつう 乱暴である	12.1 84.5 3.4	26.1 67.4 6.5	17.2 72.4 8.6	30.4 58.7 10.9
人の話をよく聞く ふつう 人の話を聞かない	32.8 65.5 1.7	39.1 52.2 8.7	13.8 72.4 12.1	10.9 76.1 13.0

・資料不備の4例を除く

小 括

今回の調査では「遊び・運動」や「歩行」時の屋外の事故が多く、外出や外遊びの機会が多い夏休みの特徴といえる。また、旅行先などの不慣れな場所や友だち・親戚とはしゃぐことなど、夏休みの非日常的状況が事故発生の誘因となっているのも特徴的である。疲れや眠気・不気嫌のときにも幼児は事故を起しやすく、親の配慮の必要が明らかにされた。さらに親にせかされたために事故をおこすことも多く、親の注意が喚起される。事故多発児（3回以上）5例について、親の養育態度および親と担任による行動特性の評価との関連では1例が担任の評価と多少の関連がみられたのみである。即ちどのような子も事故発生の危険性が考えられる。従って環境を整備し経験を豊かにさせると共に心身の状態への配慮が事故防止に役立つといえる。

II 親と子の歩行行動の観察とその分析

ここでは、VTR（ビデオカメラ）を使い親と幼児の行動を観察し、それによって事故につながる危険性の有無について分析を試みた。この目的を達成するために、親と子の自然な行動（動きや表情）をビデオカメラでとらえるように努め、その一連の流れを観察することにした。

また、収録したビデオテープの分析にあたっては、便宜上いくつかの項目（本文参照）を設定し、それらの項目ごとにチェックを行ない、その総数にしたがって事故への危険度を知らうと試みた。

なお、今回の調査にあたっては、都内城北地区にある私立A幼稚園（北区）と、私立B幼稚園（板橋区）の親と幼児が対象となっている。

観察調査結果と考察

1. 親と子の登園時における様態

A幼稚園に通園する幼児の大半は通常通園バスを使うため、歩いて登園する幼児は観察当日27名であった。（親も同数）

観察にあたっては、登園する親と子の様子がわかるように、ビデオカメラを（図3）の場に設置し、連続して約30分（午前9時から9時30分）撮影することにした。

（図3）に示すように、A幼稚園はT字路の角地に位置し、全体的な見通しはあまりよくなく、特に、右側の坂道から上がってくる車が園の横断歩道からは見えにくくなっている。また、園の向い側にある公園（ここを通り抜けて通園する幼児が何人かいる）が、道路や園よりかなり低くなっているため、A幼稚園をはさんだT字路の道路全体を見えにくくしている。

車の通行量は、頻繁とまではいえないが観察中の30分

間のうち、バイクを含め120台あまりの往き来がみられた。

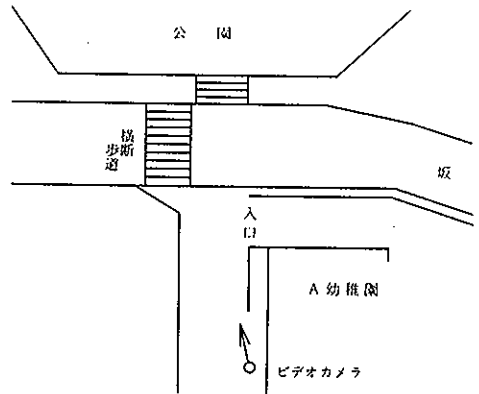


図3 A幼稚園とその周辺およびビデオカメラの位置

また、観察当日は、雨天で車で通園する幼児がいつもより多く、対象幼児数は27名（親も同数）であった。

まず、歩行の際における幼児と親との間隔、および歩行の順をみると、（表11）、（表12）となっている。

（表11） 親との距離

	人数	%
手をつないで	17	63.0
少し離れて	8	29.6
かなり離れて	2	7.4
計	27	100.0

（表12） 歩行の順序

	人数	%
親子一緒に	17	63.0
母親が先	7	25.7
子どもが先	3	11.1
計	27	100.0

（表13） 歩くルート

	人数	%
車道を歩く	7	25.9
歩道を歩く	20	74.1
計	27	100.0

(表11)(表12)でみると、親と子どもが手をつないで一緒に歩行する割合は6割(63.0%)を占め、車の通行に気をつけて登園している様子がうかがえる。しかしその反対に、雨天で傘をさし、見通しがいつもより悪い状況にもかかわらず、親の手を離れ子どもだけが先に歩いていく親子や、その逆に親が先に行って子どもに注意を向けない親も少なからず見られた。

幼稚園の入口まで、定められた歩道を歩行することは事故を未然に防ぐ上で重要であるが、今回の調査では車の通る車道を歩いて登園する親子が全体の25.9%みられるなど、安全への注意に欠ける状況が観察された。

また、その際親が十分に注意しているかどうかをみると、約7割(70.4%)にあたる19名の親が注意しながら歩行していることが明かになっている(表14)。

(表14) 親の注意

	人数	%
注意する	19	70.4
しない	8	29.6
計	27	100.0

親と子どもと一緒に歩行する場合の子どもの様子を観察すると、歩行中に左右を確認しながら歩行している幼児は、全体の14.8%(4名)にすぎず、大半の幼児は親に従って歩行している(表15)。このようなケースに、親も注意を怠ると交通事故への危険はより一層増すことが十分予想される。

さらに、幼稚園の前の横断歩道での様子については(表16)になっている。

それによると、横断にあたって左右確認を含め親の約半数の13名(48.1%)が注意している。しかし、「あまり注意しない」「ほとんどが無視」が14名みられた。幼児の登園は日常的であるため、親の側の「慣れ」によるとしても、事故を防ぐ、あるいは回避のためには道路の横断では十分に気をつける必要がある。

その他、横断の際、幼稚園の入口に近いルートをとろうと、斜めに歩行する親子も一部にみられるなど、事故への危険性の高い行動もみられた。

また、歩行時に車が接近した時の行動としては、親と子どもの行動に若干の違いがみとめられた。(表16)

親に比べ、子どもの場合その半数が車が接近してもそれを避けようとはしていない。たとえば、車がスピードを落としたりとしても、危険なしとはいえないので、車の接近時における注意は必要以上にもとめられているといえ

る。

このA幼稚園での親と子の登園に関して以上のような点がビデオによって観察された。

全体を通してみると、観察当日雨天で見通しがあまりよくなく、車の往来もあったことが、かえって親に注意を起こさせた状況が理解された。また同時に、全般に子ども自身の車にたいする注意や行動に問題がないとはいえず、特に親から離れたときは、事故への危険性が高いことが改めてみとめられた。

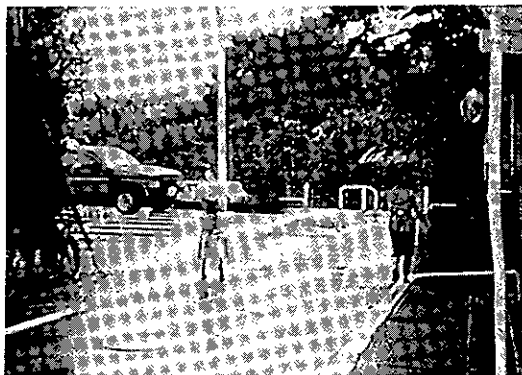
2. 親と子の降園時における様態

— B幼稚園での観察を通して—

幼稚園の降園時における親子の行動を、都内B幼稚園の親と園児を対象に観察し、1と同様に検討を加えてみることにした。

(表15) 子どもの歩行様態

	人数	%
左右の確認をしながら親に従って	4	14.8
ふざけながら	19	70.4
その他	0	0
	4	14.8
計	27	100.0



登校時、親は車(左)からおりてこず、子ども(中央)がひとりで幼稚園に

(表16) 親子の回避行動 人数(%)

		子どもの場合	親の場合
車の接近(有)	注意して回避	4(14.8)	6(22.2)
	注意せず	4(14.8)	2(7.4)
接近(無)		19(70.4)	19(70.4)

まず、B幼稚園の周囲の状況と観察用のビデオカメラ(2台設置)の位置について、(図4)で表わした。

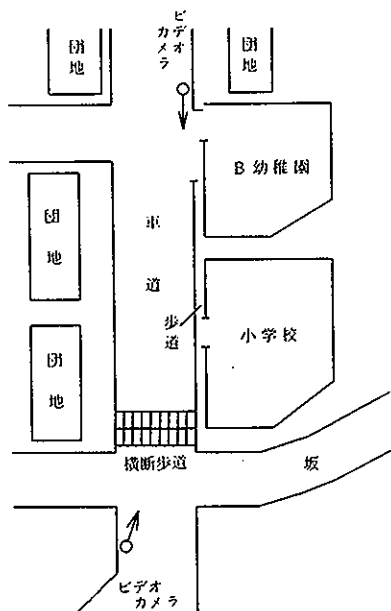


図4 都内B幼稚園の周辺状況

今回の観察対象となったB幼稚園では、ビデオカメラを2台設置し、降園時における親子の歩行行動を同時に撮影し、動きや表情の観察に努めることとした。

まず、(表17)(表18)では親に子どもとの距離と歩行の際の順序を表わしている。

これによると、観察当日の天候(晴天)や道路状況(見通しがよい)から、A幼稚園とは異なる歩行の様子が表われている。

たとえば、ここでは親と子どもが離れて歩行する割合が高く、その際子どもが先行し、親は二・三人のグループをつくって歩行している。

(表17) 親との距離

	人数	%	男児	女児	不明
手をつないで	4	14.3	2	2	-
少し離れて	14	50.0	1	11	2
かなり離れて	10	35.7	7	1	2
計	28	100.0	10	14	4

※「不明」は、ビデオの映像で男・女児の別が判明できなかった子どもを指す。

(表18) 歩行の順序

	人数	%	男児	女児	不明
母親が先	4	14.3	1	3	-
子どもが先	20	71.4	7	9	4
一緒に	4	14.3	2	2	-
計	28	100.0	10	14	4

また、その場合、女児より男児に多く、親の目を離れているケースがほとんどであった。

先述したように、当日は天候や道路状況(歩道と車道がガードレールによって分けられている)によってこうした歩行様態となったものと思われる。しかし、子どもの車道への飛び出しや歩道を走る自転車の増加などから考えてみると、事故防止のうえから、親と子どもはできれば手をつないで歩行するようにすべきであろう。

次に、(表19)は歩くルートを表わしている。6割(64.3%)の幼児が定められた歩道を歩いている反面、35.7%にあたる10名の幼児が車道上を歩いている。

その場合、親が車に気を付けているかどうかでは、約6割(57.1%)が注意をしておらず、幼児の約9割(89.3%)の25人は歩行中の左右確認をしていない(表20)、(表21)。

(表19) 歩行ルート

	人数	%	男児	女児	不明
車道	10	35.7	3	4	3
歩道	18	64.3	7	10	1
計	28	100.0	10	14	4

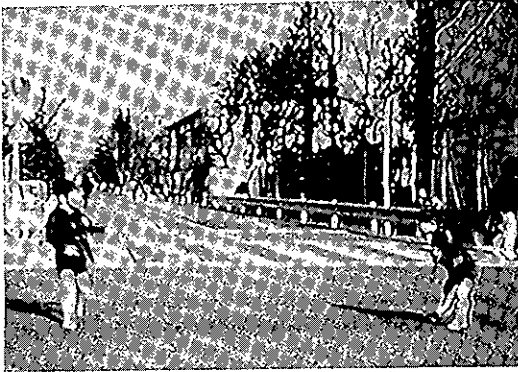
(表20) 親の注意

	人数	%
注意あり	12	42.9
なし	16	57.1
計	28	100.0

(表21) 子どもの注意

	人数	%
注意あり	3	10.7
なし	25	89.3
計	28	100.0

また、歩行中注意をせずに、友だち同志でふざけあいながら走ったり、遊びながら親から離れて降園する幼児も一部にみられた(写真B)。そのことがすぐに何んらかの事故につながるとはいいきれないが正しく歩道を歩くようにすることが事故防止のためには必要であることはいうまでもないことである。



親から離れて、友だちと路上でふざけ合う子ども

次に、横断歩道での親の様子については(表22)のようになっている。

それによると、注意して横断歩道をわたっている親は、全体のわずか14.3%(4名)にすぎず、他の親、特に集団で降園する親の中には話に夢中になって全く注意を払っていない親も少なからず観察された。

この他、歩行あるいは横断歩道上で車の接近があった場合、親と子どもはどういった行動をとるのか、2台のビデオカメラから観察してみた。それによると、親では5人中3人が車の接近に気づいてそれを避けようとしている。しかし子どもになると、5人のうちわずか1人しか車の接近に気づかず、きわめて危険な場面がみられた。

(表22) 横断歩道での親の行動

	人数	%
注意して横断	4	14.3
あまり注意していない	4	14.3
注意しないで横断	13	46.3
不明	7	25.0
計	28	99.9

(※「不明」はビデオテープから判断できない場合をいう)

それを反対側に設置したビデオカメラから見ると、ほとんどの親と子どもが車の接近や、歩道を走ってくる自転車に注意をしていない様子が観察された。

また、同園にはバスや歩行による通園の他に、自転車による通園も行なわれている。

その状況を見ると、走行中左右確認をしている親は、約6割(57.9%)いるが、全く注意せずに子どもを同乗させている親が8名、42.1%いた。

また、車の接近に際しては、全員が回避または注意を払っていることが観察された。

それにもかかわらず、今回の観察対象となった19名のうち、車道を走ったり、車道のセンターライン上をジグザグに走行、さらには子どもを立たせたままの姿勢で乗せるなど、走行中の安全に十分な注意が払われていないケースも少なからずみられ、親の側にも問題のあることが明らかとなった。

以上のように、A・B両幼稚園の登・降園時における親子の歩行状況を観察した結果をまとめると次のようになる。

1. 幼稚園への登・降園を通して親子の歩行行動を観察した結果、全般に交通ルールを守っているケースは少なく、予想以上に日常的に危険につながる恐れのある歩行がみられた。
2. また、天候や親子の行動、親同士の集団化、さらには通行上の見通しの良し悪しなどによって、親子の歩行行動が左右されることが明らかとなった。
3. 特に、天候がよく、比較の見通しのきく道路での歩行では、かえって交通ルールを守らないケースが多く、なかでも、親同士が何人かのグループになって話に夢中になっていたり、子どもが先に行ってしまうなど、いくつか問題ある行動がみられた。
4. その他、道路の歩行や横断にあたって、今回観察した幼児をもつ親の多くに、安全の確認をする割合が少なかったことから、今後は親への実効性ある安全指導を進めていくことが急務といえよう。

また、子どもにたいしては歩行を含めその行動特性(道路へのとび出しや歩行中のふざけ)を十分にふまえた、安全教育の普及が急がれるべきであろう。

おわりに

過去3年間にわたる幼稚園児とその親を対象にした調査結果から次のことを知り得た。

その1つは、幼稚園児の場合、当然の事ながら事故多発傾向をもつ子どもの存在は認められるが、多くの事故は、ごく一般的な子どもが経験しているものであり、幼

児期の子どもの行動特徴を考えたとき、それはおこるべくしておきたという種類の事故であるということである。

その2は、幼稚園児の場合、交通安全などについての基本的な知識は十分身につけているが、その知識が実際の行動にな生かされていないことが多いということである。

その3は、保護者である親たちが必ずしも保護者としての責任を果たしていないということである。幼児期の子どもの行動特徴を正しく理解しないで、口だけの安全教育をいくら繰り返して行っても効果は期待できないことを、幼稚園児の路上での危険な行動は明確に示している。

以上の結果から、幼稚園児に対する安全教育については、まず保護者に対しては、幼児期の子どもの行動特徴を正しく認識させ、より具体的な教育を繰り返して行うよう指導するとともに、安全行動の良きモデルとなる心構えを常にもつことが要求される。園児に対する教育については、子どもの個々の性格や行動についての正しい理解に基づいた、きめの細かな教育を実際の場面において具体的に反復して行うことが必要であり、保護者の側の

自己満足的な一方的な指導に終わってはならない。幼児期の事故は確かにおこるべくしておきるものであることは否定できないが、おこしてはならない事故が多くあることも事実である。それを防ぐことは、幼児の保護や教育にあたる者に課せられた重要な課題のはずである。

引用参考文献

- 1) 厚生省児童家庭局母子衛生課監修：母子衛生の主な統計，財母子衛生研究会，1989年
- 2) 総務庁青少年対策本部編：青少年白書（平成元年度版），大蔵省印刷局，1990年
- 3) 高橋種昭，他：現代児童の生活実態に関する研究—乳幼児の事故と安全教育—，日本総合愛育研究所紀要第25集，53～61頁，1989年
- 4) 高橋種昭，他：現代児童の生活実態に関する研究—親の養育態度と安全行動—，日本総合愛育研究所紀要第26集，25～32頁，1990年
- 5) 日本総合愛育研究所編：1991/92 日本子ども資料年鑑，426～427頁，1990年